

# ハノイ人文社会科学大学 学科長が佐々木学長と懇談

国際交流協定校であるベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学(USSH)のヴォ・ミン・ウ長らと懇談した。USHは同国を代表する人文社会科学系の大学で、本学とは1997年に協定を締結。協定締結以来、本学では50人を超える留学生を受け入れ、また、石巻専修大学を交えた3大学合同ゼミの開催など、学生や教員による活発な相互交流・研究を行っている。



佐々木学長(右から2人目)、ウ学科長(同3人目)と関係者

11月13日、生田キャンパスを訪れ、佐々木重人学長らと懇談した。USHは同国を代表する人文社会科学系の大学で、本学とは1997年に協定を締結。協定締結以来、本学では50人を超える留学生を受け入れ、また、石巻専修大学を交えた3大学合同ゼミの開催など、学生や教員による活発な相互交流・研究を行っている。

2002年に特別聴講生として文学研究科に在籍するなど、本学とゆかりの深いウ学科長は、「ベトナムでは日本や日本語研究のニーズが高まっている。大学院生の育成が重要であり、学びの場として専修大学との交流促進を望む」と希望した。佐々木学長は、「今後、学部も含めたさまざまな交流が進むことで、より強固な関係を築くことができる」と、両学の関係強化に期待を寄せた。



専修大学附属高校、専修大学松戸高校、専修大学北上高校の生徒64人が「エクステンションセンター」が11月4日、神田キャンパスの法廷教室で開催された「写真。法廷教室」を使用した公開模擬裁判。2019年度以来、裁判官、検察官、弁護人を附属高校と松戸高校生徒が、そして北上高校の生徒が刑務官と廷吏役を担当し、それぞれ本職の弁護士から指導を受けつつ、窃盗未遂罪の審理を行った。白熱した審理の結果、裁判官、裁判員(審理を傍聴した生徒)とも無罪の評決に至った。

生徒からは「難しい」とても頭を使う「証拠が大切だと思った」「中立な立場で裁判を進める裁判官の役割は大きいと感じた」「法曹になることを考えるようになった」などの感想が寄せられた。



12月から、小田急線向ヶ丘遊園駅北口に、専修大学のデジタルサイネージが設置された。小田急線で大学による設置は初。従来はポスターやチラシなどで本学の情報を発信してきたが、デジタルサイネージによって、写真や動画配信も可能となる。本学の取り組みをよりリアルタイムに発信する場として活用していく。

11月17日、4年ぶりに校友会ワイン大学が神田キャンパスで開催された。参加者からは多額の寄付金が、12月7日に東京都内のレストランで開催された。各界で活躍する校友や本学の支援者ら約50人が集結、本学を取り巻く課題や展望などについて意見を交換した。

選 挙 結 果  
▽神奈川県海老名市長選挙(11月12日投票)  
内野優氏(昭53法) 6選  
▽山口県長門市長選挙(11月19日投票)  
江原達也氏(昭61経済) 2選

専修大学・石巻専修大学 「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」推進募金 皆さまのご支援・ご協力をお願いいたします。 詳細はこちら ▶

# 専大校友を訪ねて

## 埼玉県狭山市市長 小谷野 剛さん(平7法)

日本有数の茶どころとして知られる埼玉県狭山市のかじ取りを担う。2015年に初当選し、現在3期目。行動と結果にこだわり、「市民が実感できる市政」に取り組んでいる。狭山市は東京都のベッドタウンとして発展したが、1990年代半ばをピークに人口減に転じた。「地域の活力を取り戻したい」。市長に就任した小谷野さんは産業振興と子育て支援に力を入れた。市ビジネスサポートセンターを立ち上げ、補助金に頼らない伴走型の経営支援を推進。グローバルに活躍する企業の創出を目指す。子育て分野では、若い世代の移住定住促進や子ども医療費助成の拡大などを次々と実施。共働きで子育てし

やすい街として21年度から転入者が急増。約30年ぶりとなる大幅な社会増を実現した」と達成感をにじませる。大学卒業後、田村秀昭参議院議員(当時)のもとで公設秘書を務めた。「7年間の修業時代がなければ今の自分はない」。住み込みで働きながら、人として、政治家として大切なことを学

んだ。「24時間365日、日本のことを考える」という教えは、政治の道を歩むうえでの信条となった。東日本大震災発生時も、その信条に基づきすぐに行動を起こした。当時、市議会副議長だった小谷野さんは、必要な物資が届かず、寝る場所もままならない被災地の窮状を知ると、被災者の受け入れに向けて奔走。市の幹部に直談判してまわった。最終的に、目標の5倍にあたる100世帯(500人)を市で受け入れることが決定。「行動して実現させる」。これが政治の力」と言葉に熱を込める。

母子家庭で育ち、「頑張っている人が報われる社会をつくりたい」と政治家を志した。奨学金とアルバイトで生活費や学費をまかないながら専大に通い、石川一雄ゼミで政治学や国際関係論を修めた。「政治家になりたいと伝えたところ、静かに背中を押してください、励みになった」と恩師との思い出を懐かしむ。専大で学ぶ後輩たちには、社会課題の解決に貢献できる人間になってほしいと期待を寄せ、「貴重な大学4年間を無駄にしないで」とエールを送る。座右の銘は「三源三流」。家のために汗を流し、友のために涙を流し、国のために血を流すという意味だ。全身全霊をかけて職務に励みたいと誓い、その情熱と行動力は決して尽きることはない。

## 桂小文治師匠に 青森県文化賞

落語家の桂小文治師匠は、2008年に第63(昭55商)が、青森県文化の向上発展に貢献した個人・団体に贈られる「青森県文化賞」を受賞。11月8日に青森市で表彰式が行われた。師匠は、2008年に第63回文化庁芸術祭の大衆芸能部門で優秀賞を受賞、2020年から公益社団法人落語芸術協会の理事を務めるなど、落語の普及活動への功績が評価され、今回の受賞となった。

赤の女王と生きた化石  
皆さんは「赤の女王仮説」を知っていますか？ 生物の進化の仕組みを説明する一つの仮説です。「赤の女王」は、『鏡の国のアリス』の登場人物です。アリスは赤の女王から「その場に留まっていたら全力で駆け続けなければならない」という鏡の国の不思議な性質を説明されます。生物の進化においても「種として存続し続けるには周りの環境の変化に合わせて進化し続けなければならない」のが原則です。進化できないものは淘汰されてしまうということですね。

私は、この赤の女王仮説は人の生き方にも当てはまると感じています。この現代は、特に科学技術の発展を基にした新しいテクノロジーや価値観が次々と現れては消えていきます。そんな環境の変化に合わせて自分自身もアップデートし続けなければ、時代に取り残されてしまいうる時代です。一方で、進化を語るうえで「生きた化石」と呼ばれるものもいます。彼らは周りの環境の変化が少なかったのか、進化せずに恐竜時代から生き延びています。こちらも人の生き方に当てはめると、良く言うと周りに影響されない「我が道を行く人」、悪く言うと「凝り固まった人」でしょうか。皆さんには大学生活でさまざまなアップデート(進化)をし続けて時代の最先端に食らいついて、化石のようににはならないでほしいなと思います。ただ一方で、私は生きた化石のような我が道を行く人生への憧れも残っています。

(学生部委員・前川修吾)

専修大学 TEL:03-3265-3157 募金局 E-mail:bokin@acc.senshu-u.ac.jp